

戦後における『少年倶楽部』の誌面構成と読者の様相

The states of the magazines constructed for many boys' readers of
“SHONEN CLUB” in the post war days of Japan

田中卓也
Takuya TANAKA

概要

講談社刊行雑誌『少年倶楽部』（のちに『少年クラブ』改称）は、発刊された1914（大正3）年から昭和戦前期にかけて、当時小学校高学年から中学生までの読者層の多くを“愛読者”として獲得することに成功した。彼らは立身出世による進学意識、勤勉かつ真面目であり国家に奉公できる少年像をメルクマールに、投書欄に集い次第に読者共同体を形成していった。戦後多くの少年の夢や希望を与えることを使命に、復刊を果たした。復刊されたが、投書欄の登場は発刊から数年を経てからであった。戦後の同誌は民主化政策の影響で投書内容も戦前のものとは異なり「学級新聞」や「日記」等が見られた。また誌面で仲間を求める内容のものも見られなかった。昭和30年代中ごろより「テレビ」、「まんが」といったマス＝メディアの影響を大きく受け、誌面構成に大きく波及した。後進の新興雑誌などと販売競争しながらも継続発行されたが、1962（昭和37）年にその役割を終えた。

キーワード：児童（文学）雑誌、『少年倶楽部』、読者共同体、読者意識、テレビ、まんが

Abstract

This paper is aimed to consider of characters of the magazines with many boys composed with “SHONEN CLUB” readers were concious. “KODANSHA” was the publishing business and advertisement media in those days (1914-1945). It was investigating of many advertaising with costs. The monthly (magazines) had the large circulations. The magazines were popular among with the upper grades (fifth and sixth) elementary school children, junior high school students. Most of those boys were the class of readers were composed of loved magazines fan club. It was made of success acquisition of those magazines fan. Most of fan formed the “readers (fan) communities”. they were merkmal of the image of model for boys fan of “SHONEN CLUB”.that was reissued published again by KODANSHA. That was them gave much dream, courage in post war days (1946-1962).

The readers column as the magazines fan were involved in the magazines after few years. that was published was affected by New education systems, many educational reforms and soon. Moreover, that wasn't seeking for company of readers in the magazines. About the middle of 1960's. KODANSHA was group in the dark, had sometimes hardships, kept on selling. but was fruitless, the magazines had discontinuance of publication in 1962. The succeeding magazines were "SHONEN MAGAZINE" (comics, cartoon: 1962-)

Keywords: juvenile literatures and magazines for children, SHONEN CLUB, readers (fan) communities, readers consciousness, TV (Television), MANGA

目次

1. はじめに—本研究の目的と先行研究の整理—
2. 発刊当時から戦前期までの『少年倶楽部』—多くの夢・希望をあたえた人気雑誌—
3. 『少年倶楽部』の復刊
 - 3.1 人気作家の再結集
 - 3.2 復興を望む読者
 - 3.3 読者の年齢・およその発行部数（大正3年の発刊当初～昭和戦前期）
 - 3.4 復刊をめぐる
 - 3.5 表紙および価格の推移
4. 『少年クラブ』における投書欄の性格
 - 4.1 「仲よし新聞」が投書欄に
 - 4.2 「漫画」、「トンチ（スクール）」の登場と「仲よし新聞」の変化
5. 『少年クラブ』の大判化と投書内容の幼稚化
6. 『少年クラブ』の終刊
 - 6.1 投書欄「愛読者ルーム」の消滅と読者個々の関心の重視
 - 6.2 ついに終刊へ
7. おわりに—“メディア”と“マンガ”に太刀打ちできなかった『少年クラブ』—

1. はじめに—本研究の目的と先行研究の整理—

本研究は、戦後に復刊をはたすことになった講談社（古くは大日本雄弁会講談社）から出版された児童雑誌『少年倶楽部』（のちに『少年クラブ』と表記）に光をあて、同誌の誌面内容および構成、さらに誌面に集うことになった読者らの性格・特徴を見いだすことが目的である。同誌は、1914（大正3）年の創刊であり、その後1962（昭和37）年まで発売され、40有余年続いた人気の少年雑誌であった。廃刊後の後継雑誌として、1959

(昭和 34) 年にマンガ誌として刊行されていた『少年マガジン』に吸収され、その役割を終えた。

戦前期までに出されていた児童雑誌や少年雑誌などは、戦後まもない時期から復刊していた¹⁾。同誌もそのひとつであり、戦後復興が求められた混乱した時期において、早い時期から子どもたちに夢や勇気を与えるために発刊された。また 1948 (昭和 24) 年ごろには、かつて同誌が大正期から昭和戦前期まで不動の欄として位置づいていた愛読者が集う、投書を寄せた「投書欄」も復活し、当初読者の声を誌上に紹介する欄として「ぼくらのページ」として設けられるようになった。そこに集った読者らは、おのおの小説や物語の主人公、プロ野球選手をはじめとしたスポーツ選手、力士を「ヒーロー」として憧憬し、投書を寄せることで、編集者との関係を厚いものにしていった。むしろそれまでの投書欄に見られるような、読者同士の交際も少なからず見受けられたが、読者と編者の関係が密になったり、交際を求める者を告知し、住所欄、氏名を誌面に掲載し、むしろ自由に交流できるような「紹介」目的がなされるようなものへと変化を遂げていくことになる²⁾。

さて、筆者はこれまでに明治期から昭和戦前期にかけて発刊されてきた児童雑誌に着目し、読者の性格や特徴について明らかにしてきた。ここでは、誌上で仲間を見つけ、交際し、次第に誌友同士の絆・結束を結ぶようになり、いわゆる「読者共同体」を形成したことが検証してきた。また投書欄を通じて、読者等の共同体「われわれ」というアイデンティティを見いだしたとされる。しかしながら戦後に発刊された児童雑誌においても読者共同体が存在したのかという問題は未だ残されているため、その問題を解明することを試みるものである。

「読者」に焦点をあてた研究はこれまでに多くの蓄積が存在している。①今田絵里香『叢書ジェンダー 17 少女の社会史』(劉草書房、2007 年)では『少女の友』・『少女倶楽部』を対象とし、少女雑誌に示された「少女」の行為規範の変遷を明らかにしながら、読者が少女雑誌の提示する「少女」をいかにとらえ、受け入れたのかについて分析・考察を試みた。②本田和子『女学生の系譜—彩色される明治』(青土社、1990 年)では女子学生の読者共同体の存在を指摘し、「少女幻想共同体」と名付けている。また川村邦光はその著書『オトメの祈り』(紀伊國屋書店、1993 年)において、明治後期の少女雑誌を考察し、投稿欄を通じて、女学生の資格の有無に関わらず、ペンネームを用いて『少女』という虚構集団を形成することを明らかにした。川村は「オトメ共同体」とその読者集団を呼称した。また内田雅克のように、第二次世界大戦までの少年少女雑誌に描写された「少年」像の構築をジェンダー的に分析し、“弱さに対する嫌悪=ウィークネスフォビア”という概念を提起した。新しい研究も行われてきているのは注目される(内田『大日本帝国の「少年」と「男性性」—少年少女雑誌にみる「ウィークネスフォビア」—』明石書店、2011

年)。

『少年倶楽部』についても、先行研究は存在する、黒古一夫は『『少年倶楽部』・『少年クラブ』の歩み』と題した緒言をまとめており、同誌の売り上げ数の変遷、編集方針などの動向などについて記されている³⁾。また戦前期まで同誌の編集に関わりながらも、戦後には新たなマンガ雑誌の創刊に尽力したとされる加藤謙一について『少年倶楽部時代 - 編集長の回想』(講談社、1968年)などにもこれまで取り上げられてきてはいるが、雑誌そのものの研究に焦点が当てられ、読者の様相についての考察には迫っていない観がある。さらに『別冊太陽 子どもの昭和史 1945年～1969年』(講談社、2000年)などにも同様の記載で紹介されているのみに止まっている。

執筆者はこれまで指摘されてこなかった戦後のわが国における「児童」に注目し、戦前と戦後の少年雑誌の発行された背景を概観することで、当時の少年読者の姿や心性が浮かび上がってくると考える。本研究は、戦後のわが国の児童雑誌読者の研究の一端を明らかにするものといえよう。なお、本研究は「近代日本における少年雑誌の普及と少年読者意識形成に関する歴史的研究」(平成24年度文部科学省科学研究費助成事業科研費研究【基盤研究C】<課題番号:23531032>、研究代表者:田中卓也)の研究成果の一部である。

2. 発刊当時から戦前期までの『少年倶楽部』 - 多くの夢・希望をあたえた人気雑誌 -

わが国では、第一次世界大戦にかけて資本主義が発展し成熟することになっていった。このことに伴い「児童」を対象とした雑誌が相次いで創刊された。資本主義体制が整備されるにつれて、それまでこの国では存在しなかった「労働者」(階級)が誕生し、その労働者の子女が「児童向け雑誌」の読者になったということも意味していたし、農民や労働者の子女を主な読者対象とする雑誌が相次いで創刊されるようになったということは、遅れてはいたもののわが国の「近代」化が順調に進みはじめたことを意味する。先述した同誌の編集長であった加藤謙一は、『少年倶楽部時代 - 編集長の回想』のなかで、創刊部数についてふれている。『少年倶楽部』の創刊時部数は三万部で、加藤が編集長になった大正11年時には8万部が売れ、大正12年に12万部、翌年の大正13年には30万部と年々好調に増え続けていた」といわれる。また当時大正自由教育の影響を受けた『赤い鳥』や『金の船』(のちに『金の星』に改称)がそうであったように、『少年倶楽部』も当時活躍していた多くの文学者を執筆者として迎え入れることで、「大衆的」とは言え文学雑誌としての体裁を整えていた⁴⁾。たとえば土田杏村、小川未明、沖野岩三郎、宇野浩二、佐藤春夫、大町桂月、三木露風、西条八十、野口雨情、直木三十五、サトウハチロー、佐藤紅緑、大仏次郎、島崎藤村、菊池寛、竹下夢二、川端康成、久米正雄、山中峯太郎、江戸川乱歩、

武者小路実篤、南洋一郎、井伏鱒二、山川惣治などの作家や詩人らが『少年倶楽部』に登場し、雑誌の発展に大いに寄与した。

多くの人気作家を抱え、順調に発行部数も増加させてきた『少年倶楽部』は、昭和期とりわけ太平洋戦争の開始された1941（昭和16）年ごろをむかえると、頁数も200頁程度に減少し、最盛期であった頃の半分程度にまでなった。その反面で一举に「少国民・軍国少年」養成のための雑誌と化すようになる。わが国が敗戦を経験する1945年8月まで同誌の大半は、国民総動員で完遂しようとしていた「戦争」やそれに関係する「軍隊」、「神社参拝」、「慰問」などの記事が誌面をにぎわすことになり、読者の心のなかにも深く戦争について刻み込まれた。1945年8月15日に連合軍軍に対し「無条件降伏」を行ったわが国は、当時読者であった子どもたちの多くを戦場に送り出し、多くの犠牲を払うことになる。さらに生き残った少年らにも、簡単には癒えることのない大きな傷を与えてしまうことになった。

3. 『少年倶楽部』の復刊

3.1 人気作家の再結集

戦後、わが国は連合軍総司令部（GHQ）のもと、管理下におかれることになった。マッカーサー元帥の来日や進駐軍の派遣などはその代表であろう。そのような状況において出版界では、少年雑誌、少女雑誌が再び活気を取りもどすことになった。とりわけ戦前期まで人気を博していた講談社刊行の『少年倶楽部』、『少女倶楽部』などがそれであった。1946（昭和21）年1月から、それまでの“倶楽部”の名称を“クラブ”と変更し、『少年クラブ』、『少女クラブ』と新たに生まれ変わった。また兄弟誌、姉妹誌として光文社より『少年』、『少女』も発刊された。

『少年倶楽部』は、戦後になってもこれまでと変わらず読者らに夢と勇気を与えようとした。それは雑誌の誌面をにぎわした執筆者陣からもうかがえる。下村湖人、佐藤紅緑をはじめとし、サトウハチロー、山川惣治、斎藤五百枝らの挿絵画家、さらに原一司、新関健之助、謝花凡太郎、島田啓二らを起用していくことになった。

3.2 復興を望む読者

1946年に出された『少年倶楽部』の【八・九月合併号】では、「仰げ日の丸、新日本の門出だ」という標語がおかれた。前号の「一億総鉢巻」や前々号の「戦わんかな一億総斬り込みの時いたる」から見ると、無難のようだが、この国旗もやがて排斥の声をあげられるにいたる気配は、まだこれが編集されたときには、感じられなかったものと見える⁵⁾。しかしながら1947年ごろになると、同誌の中味も、わが国の復興を期待する未来に向け

た記事なども誌面に登場するようになった。「十年後の日本」、横井福次郎の「不思議な国のブッチャー」などがその代表であった。

3.3 読者の年齢・およその発行部数（大正3年～昭和戦前期）

同誌の対象年齢については、講談社が刊行していた雑誌などからも判断することができるが、およそ小学5年生ごろから、中学2年生あたりまでであった。『幼年倶楽部』は小学校低学年から4、5年生までであり、1939（昭和14）年4月号の講談社による記事によれば、「少年倶楽部を卒業したらキング！」「小学校を卒業したらキング！」といった広告が紹介されることもあり、出版社の講談社は、読者（層）を絞っていかうとしていたことがうかがわれる。

ちなみに大衆雑誌『キング』では、その目的に「皆さんの中には、上の学校へゆく人もありませう。すぐ世の中へ出て働く人もありませう。どちらの人も、これからが本当の勉強時代なのです。将来よくなるのもならぬのも、これからの心がけ一つです。先生や、目の上の教をよくまもり、いきた学問をしてゆくことが大事です。キングは、それを心がける人のために出してある雑誌です」とあり、キングの目的は明確に示されていた⁶⁾。また『幼年倶楽部』誌の一節では、「どちらにもうつくしいえ（絵）、ゆくわいなまんぐわ、ものしりになるはなし、たのしいはなしなどいろいろあります。大きいにいさんやねえさんにおしらせください」（幼年倶楽部・昭和14年10月号）とあり。小学校の低学年までの幼児・児童向けの宣伝であるようにうかがえる編集方針となっていたことからわかる⁷⁾。

また、少年倶楽部の発行部数は、『講談社の八十年』（講談社八十年史編纂委員会、1989年）に、データが掲載されており、「創刊当時2万部ほどだったものが、大正9年に8万部、昭和2年30万部、昭和3年45万部、昭和4年50万部、以下、昭和6年67万部、8年70万部と驚異的に増えつづけ、11年新年号で75万部の最高記録に達しています」と明記されている。同誌は、昭和初期における雑誌の大ベストセラーであることはうかがえる。しかしながら、戦後については、このような記載がみあたらないため、不明である。

3.4 復刊をめぐる

では、『少年倶楽部』復刊時の内容はどのようなものであったのか。同誌復刊の第1号の目次を見てみたい⁸⁾。ちなみに同誌の定価は「80銭」で送料「5銭」と奥付に印刷されている。

【目次】（ ）内は頁数

表紙：「富士を背負ふ」……………松野一夫

口絵：「雪の朝」……………	椋島勝一
詩画集：「雨ニモマケズ」……………	宮沢賢治（一）
☆新しい道を堂々と……………	中野五郎（一五）
お山の声……………	泉光一（五）
科学物語「太陽の子どもたち」……………	服部静夫（三〇）
児童劇「トンチン時計」……………	久米元一（四〇）
連載漫画「日出ちゃん」……………	帷子すすむ（二〇）
さあ、わかりますか……………	（二九）
昔話「小挽善六」……………	小出正吾（二二）
詩「夜汽車の中で逢った少年」……………	百田宗治（三五）
☆少年諸君へ……………	佐藤保太郎（九）
	加藤武雄（三四）
仲良し新聞……………	（四四）
社告……………	（四九）
歴史小説「楠木正成」……………	大仏次郎（四六）
▲略画の手本「犬」……………	河目悌二
▲お父さん、聞えるでせう……………	榎戸浩

「宮沢賢治」、「久米元一」、「百田宗治」、「大仏次郎」の名が見える。同誌は、戦後の混乱した落ちつかない時期でありながらも、著名な作家に執筆を依頼することで、戦前期までの定評のあった同誌のレベルを落とさないように努めたのであろう。すべて全国のいたるところで、寂しい思いに身を寄せている読者ら一筋の光をあたえようとした、そのような決意さえうかがえるのである。混乱期であったことから、誌面の広告も数社に限られた。「トンボ鉛筆」、「地球鉛筆」、「国民工業学院」などの名がうかがえる。その後「ラジオ技術講座」「ペン習字」、「中学講座（通信講義）」などの広告も多く掲載され、誌面を飾ることになった。同時期に発刊元の講談社は「社告」を出すにいたった。以下にその内容を見よう⁹⁾。

【社告】

本社はさきに自粛の意味で、「現代」、「講談倶楽部」の二誌を自発的に廃刊し、それを天下に公表いたしました。然るにその後、本社発行の全雑誌が廃刊されるといふふうに移り伝へられ、全国多数の愛読者の皆様から、真偽のお問合せをいただいております。

誤報により本社のかうむった迷惑をはともかう、愛読者の皆様に御心配をおかけしましたことを深くお詫び申し上げます。

本社が現在発行の雑誌を廃刊するというふようなことは、決してないのであります。「キ

ング」、「婦人倶楽部」、「少年クラブ」、「少女クラブ」、「幼年クラブ」、「コドモエバナシ」（「講談社の絵本」改題）は、依然として発行されてをりますし、また将来も続刊いたします。なほ、時代の進運に伴ひ、さらに新企画の雑誌も近く創刊する予定で、目下着々研究中であります。

右、直接お問合せくださった方々はもとより、他にも同様の疑問を持ってをられる方も多いことと存じますので、ここに誤報を正し、本社の態度を表明する次第であります。

昭和二十一年三月

愛読者各位

大日本雄弁会講談社
少年クラブ編集局

同社は、雑誌をこよなく愛する「愛読者」に対して誤報に対しての「お詫び」、『少年クラブ』をはじめとした数誌の継続発行についてのお知らせを明記した。混乱期であったものの同社は、読者を失わないよう懸命に配慮したのである。

3.5 表紙および価格の推移

表紙については、復刊時には、少年 1 人と動物（馬、犬など）と掲載されているものが確認できる。少年のあどけない「笑顔」や「ほのぼのとした様子が描かれていて、今後の平穩無事を祈るかのようなメッセージのこもったものであるかのようなようである。少女の姿は映し出されていない。また同誌の価格については、復刊当初を見れば、第 33 巻第 2 号（1946 年 2 月 20 日発売、定価：1 円 20 銭、送料 5 銭）、第 33 巻第 3 号（1946 年 3 月 20 日発売、定価：2 円 送料 5 銭）、第 33 巻第 4 号（1946 年 4 月 20 日発売、定価 4 円 送料 5 銭）、第 33 巻第 5 号（1946 年 5 月 20 日発売、定価 3 円 送料 5 銭）、第 33 巻第 7 号（1946 年 7 月 20 日発売、定価 4 円 送料 5 銭）、第 33 巻第 8 号（1946 年 8 月 20 日発売、定価 4 円 送料 15 銭）となっていた。翌年出された第 34 巻第 5 号（1947 年 4 月 20 日）は 10 円に高騰し、「社告」のなかで、物資不足による物価上昇にともなう、雑誌価格の高騰について読者に伝言している様子も見られる。同年 11 月号では、定価 18 円で送料 50 銭、1948 年新年号では定価 20 円（送料 50 銭）までになった。

4 『少年倶楽部』における投書欄の性格

4.1 「仲良し新聞」が投書欄に

同年 8 月号（定価 35 円、送料 50 銭）は発刊され、引き続き雑誌価格の高騰は止まら

なかった。全ページ数の54はほぼ変化が見られない。またサイズはA5版で統一されていた。

廃刊直前の1962（昭和37）年には、1冊160円にまで跳ね上がることになる。もちろん家庭での購読者もいれば、そうでない者もいたであろう。学校や遊び場などで「回し読み」をした児童・少年らも少なくなった。かくして同誌はさまざまな形式で手にとって読まれた。

復刊された同誌には戦前時のような「投書欄」は登場しない。発表者の確認によれば、一番最初のもは、同誌第33巻第2号のことである。紙幅は2ページ程度のものであった。では以下にその内容を見てみたい¹⁰⁾。

☆「学校だより」欄

◎僕らの学校は昨年八月六日、原子爆弾で全焼し、山のふもとのバラックだてで勉強をしております。校舎は土間で、天井もなく、冬はずいぶん寒かったが、がんばりました。昔の寺子屋時代や、二宮尊徳先生の勉強されたことを思ひ、何がなくても、よく先生の教へを守り、一生けんめい勉強して、りつぱな国民になります。(広島県 升田利明)

◎僕たちの学校では新しく弁論大会といふのができ、この前に第一回を行ひ、ひじょやうな成績をあげました。みんな正しい言葉を使つて、郷土のこと、学科のこと、研究発表など、一生けんめいになつてやりました。この会には校長先生をはじめ先生方もせんぶ出席されて、熱心に聴いてくださるのです。(広島県 藤川日吉)

☆「進駐軍と僕たち」

◎自由主義とは

自由主義とはどういふことか、ある日、先生が話された。自由主義とは、ふつうの人は、自分ばかりがどんなことをしてもよい。といふことだと思っているが、自分の役目をしてしまってから、自分のしたいことをするのがほんたうの自由主義だと説明して下さった。僕がいつか駅前にとまっていたジープをみたとき、進駐軍の兵隊さんがジープの窓をふいたり、そのほかの部分を掃除していた。それがすむと、腰をかけてチューインガムをかんでいた。進駐軍の兵隊さんは、自分のきめられた役目を完全に仕上げたあとは、ゆっくりたばこをふかし、愉快地遊んだりする。これがほんたうの自由主義だといはれる先生のお話はよくわかった(鳥取県 大谷公夫)

戦後の民主化政策の影響が色濃く映し出されている。敗戦後の授業の様子や新しく弁論大会を開催した様子など、少年らの前向きな取り組み記事が目につく。「進駐軍と僕たち」

と題するものも存在し、「自由主義」という言葉がとびかっていることなどからもうかがえよう。またそのほかにも「ローマ字の練習コーナー」、「(ローマ字の) クロスワードパズル」なども登場するようになった。

「仲よし新聞」は以後も継続された。「少年の声」なる投書欄がお目見えするようになる(第 33 巻第 8 号より)。投書欄のはじまりであったようである。以後同コーナーは、「仲よし新聞 編集助手太郎」と明記されるようになり、さらにボリュームアップされていった。しかしながら編集者への日記、出来事の報告が主であったことは変わらない。「ぼくらのページ」なる投書欄が 1947 (昭和 22) 年 10 月号から登場し、詩や短歌の投稿、「動物の泣き声のちがい」や「夢をみるのはなぜ」といった子どもらしい内容を「質問箱」などに寄せ、読者それぞれに回答するものであった。

4.2 「漫画」、「トンチ (スクール)」の登場と「仲よし新聞」の変化

また同誌第 33 巻第 9 号では、はじめて「漫画」が誌面に登場するようになった。「うごく土俵」という原一司作がその最初であった。のちに、「レンサイマンガ」として「ふしぎな国のブッチャー」(横井福次郎作)も第 33 巻第 11 号から掲載されるようになり、次第に人気を博した。しかしながらそれほど多くの誌面を割かれていないのは目を引く。同誌第 35 巻第 10 号(1948 年 11 月 20 日号)では「トンチスクール」なる欄も設けられ、ギャグ、ユーモアのセンスを読者に磨かせるものとして機能するようになる。

前述の同誌第 33 巻第 9 号には、さらに「僕たちの生活報告」欄が登場し、「新聞で勉強」、「自治会の一善」、「学級投票箱」、「研究帳」、「学習発表会」などの記事が次々と掲載されることになった。「民主化政策」のあらわれであるかのようなようである。また学習教材的なものも登場した。「詩」・「俳句」の投稿欄である。「少年諸君へ 太郎の通信」には「今月は、読者の投書が多かったので、ぜんぶを読者の原稿でうづめた。このページは少ないけれども少年諸君のページだから、どしどし投書してくれたまへ」と、投書の本数は示さないものの、多くの読者にさかんに投稿を呼びかけている¹¹⁾。また講談社の「十八番」ともいえる「(大)懸賞企画」についても、同誌第 35 巻 12 月号(1949 年 1 月 20 日)で確認でき、優等賞には「水彩絵の具」(10 名)、佳作には、「少年クラブ特製絵葉書」(500 名)などを配布した。また受賞者は誌面にその名が掲載され、読者らは名前の掲載と賞品をもらうことに喜び、次回に期待するのであった。かくして同誌の読者はこのようなかたちで獲得していった。

5. 『少年倶楽部』の大判化と投書内容の幼稚化

同誌は、1955 (昭和 30) 年 6 月号よりそれまでの A5 版から B5 版へと大判化し発売

されるようになった。同誌のみならずこの時期、多くの児童雑誌、少年少女雑誌が大判化し、ボリューム化を図っている。テレビの影響も受け始めていた時期でもあるため、月刊誌が次第にすたれていき、逆に週刊誌の登場がめざましくなっていることとも関わっているものと思われる。

1960年新年号（第47巻第1号）を見てみると、定価150円で総頁は296までのボリュームに進化している。目次はつぎのようになっていた¹²⁾。

【目次】（ ）は頁数

<口絵>日本一のせいぞろいおめでとう！

<れんさいまんが>

- ・ジャガーの目（7）
- ・**月光仮面**（19）
- ・スーパーゼット（43）
- ・ごくらく紳士（51）
- ・ダンダンくん（119）
- ・山彦タローの冒険（135）
- ・ゴロニャン大将（184）
- ・【新れんさい冒険まんが】**少年ハリマオ** 堀江卓（27）

<とじこみふろく>

- ・よたろうくん（247）
- ・出世だんご山（258）
- ・ごうけつ選手（281）
- ・【新れんさい科学まんが】電光人間 金田光二（別冊）

<よみきりまんが>

- ・チャンピオン（151）
- ・やまだし団兵（231）
- ・いたずらきょうだい（239）
- ・【新れんさい時代まんが】まぼろし城 桑田次郎（別冊）

<れんさい小説>

- ・【新れんさい科学小説】ヒマラヤの怪人 久米みのる作・小松崎茂え（70）
- ・新れんさい時代小説 地雷火小僧 山田風太郎作・石原豪人え（82）
- ・新れんさい探偵小説 きえた飛行機 福本和也作・吉田郁也え（172）

<スポーツ>

- ・うらからみた日本シリーズ（160）

- ・スキーマの王者 (94)
- ・サインの話 (164) ・怪奇記事 雪男はつかまるか (192)
- ・いけ！月世界 (215)
- ・ものしり教室 (220)
- ・感激実話 あっばれ少年画家 (224)
- ・こっけいかるた (127)

【お年玉大懸賞募集】

自転車やとけいなど

すてきな賞品が山のようにあたる！(30)

- ・ぼくらのページ (99)
- ・ふろくの遊び方 (110)
- ・少ク映画館 (167)
- ・おわらい少ク教室 (199)
- ・十一月号募集 (296)
- ・懸賞当選発表 (296)

【二月号予告】(14)

復刊の頃とは内容も大きく変化を遂げている。「まんが」の項目もより一層増加し、「スポーツ」の記事も以前に比べ増えているのに気づく。また「月光仮面」も誌面に登場していることから、テレビの影響を受けるようになっていきつつあることも想像できよう。「少ク映画館」に当時のヒーロー、スター（大友柳太郎、高橋英樹など）も登場している。さらに付録も「マジックランプ」、「紙製野球版」、「探偵カード」など数点にも及ぶようになり、豪華になっている。

また「ぼくらのページ」といわれる投書欄は継続していた。内容は「愛読者ルーム」、「出世だんご山」、「ぼくらの傑作」（イラスト、絵）、「ぼくらの文芸」（なぞなぞ、ギャグ）、「きみはしていますか」（学習）、「ぼくらの校章」というコーナーからなっていた。では「愛読者ルーム」はどのようになっていたのか。少しくのぞいてみたい¹³⁾。

☆モリーの大活躍がいつも「ジャガーの目」を、おもしろくしていますね。ことしも、モリーよ、がんばれ！（東京都 岸一郎）

☆正義の月光仮面。月光仮面のファンです。いつまでも、おねがいします。（栃木県 月沢正）

☆スーパージェットはとてすばらしい。いつもまっさきに、読みます。（呉市 一越順）

読者同士の交流、記者との交流を求めるものは見当たらない。むしろ掲載作品の感想や読者自身の思いが寄せられている。同誌第47巻第3号（1960年3月1日）でも同様の内容であるが、「月光仮面」、「よたろうくん」、「電光人間」、「ダンダンくん」というように、項目ごとに愛読者の寄せた投書を掲載している。しかしながら内容はファンであることを知らせるものや、作家の先生をはげます投書ばかりが目立つのである。また「ぼくらのページ」の内容も少しずつであるが変化が見える。さきほどの同誌第47巻第3号では「文通ルーム」が新たに登場し、個人名と宛先が記され、自由に文通できるようになっているし、「滑稽和歌」や「トン平のへや」などユーモアの要素をもったコーナーが新登場している。

読者の交流や、互いに勉学で向上し、優秀な学校へと進学していくといった戦前期によく見られた『少年倶楽部』の投書欄の投書ではなくなっている¹⁴⁾。投書内容もやや幼稚化していることを印象づけられる。

6. 『少年倶楽部』の終刊

6.1 投書欄「愛読者ルーム」の消滅と読者個々の関心の重視

戦前期の同誌とはまったくの様変わりを見せていく復刊後の『少年倶楽部』であるが、1960年8月号（第47巻第9号）には、「ぼくらのページ」の投稿欄に設けられていた「愛読者ルーム」欄がなくなっているのを確認できる。そのかわりに新しく設ける欄であろうか、誌面には「少ク・少年記者になってください」という告知が掲載されている。以下に見てみたい¹⁵⁾。

少クでは、愛読者の諸君から、少ク少年記者を募集します。諸君の地方のおもしろいニュース、あっとおどろくふしぎなこと、なんでもけっこうです。どしどし投書してください。さあ、きみはきょうから少ク記者です。みのまわりのできごとをよくみましよう。すぐ少クにはがきでしらせてください。あて先は少年クラブ記者係

投書欄で読者同士が集い、交流を図るといったもの、記者と投稿者が交流を図るものとは異なる「少ク少年記者」の募集する広告である。同じことは集英社の『少年ブック』、『幼年ブック』でも見られ、時折「(大) 座談会」などを催し、「雑誌編集者と語らう」という企画も見られる。すでに読者共同体の存在はみえず、読者個人の趣向・関心に焦点が変わっている。また「仲良しだより」なる新聞を少年クラブの愛読者に配布するという企画も同時に行っているようであり、他の読者獲得もめざされているが、あまり盛り上がった企画にはならず、よい成果を与えてはいないような観がある。「どしどしおたよりをくださ

い」と誌面を使用し、編集部も告知を続けた。しかしながら読者がおたよりをすれば、景品がもらえるという条件付きのものであり、投稿者自らの意志で投書するものばかりではなくなってきていることもこの時期の誌面からうかがえるようになってきている。すでに読者の流行に合致した雑誌でなくなっている観があったようである。

6.2 ついに終刊へ

1962（昭和37）年12月号を最後に同誌は廃刊となった。約50年間にわたり、読者の人気雑誌であった『少年クラブ』は廃刊のやむなきに至ったのである。講談社社史には、次のように記載されている¹⁶⁾。

☆少年クラブも終刊、話題作にあふれた49年の軌跡について

愛読者のみなさんへ 株式会社講談社

みなさんから毎号ご愛読いただいてまいりました少年クラブは、十二月号で休刊とし、新年号から新しい時代の少年週刊誌として生まれている本社発行の『週刊少年マガジン』と合併することになりました。少年クラブは、いまから四十九年前の大正三年十一月一日に誕生した、日本で一番古い歴史をもった少年雑誌であります。そのころから、少年クラブは『おもしろくてためになる雑誌』として、みなさんのおとうさんやおにいさんの少年時代から、毎月たくさんのかたがたにたのしまれ、愛読されつづけてまいりました。文字どおり、五十年近く、日本一の少年雑誌として、日本の児童文化につくしたやくわりが、どんなに大きいかはどなたもみとめてくださることとぞんじます。

『週刊少年マガジン』を少年クラブと思って、ひきつづいてご愛読くださいますようお願い申し上げます。長いあいだ少年クラブをお育てくださった寄稿家の先生がた、愛読者のみなさんがた、関係のかたがたにつつしんでお礼を申し上げます。つぎの日本をせおうみなさん、どうぞ、強く、あかるく、たのしいことを、ゆうかんにできりりっぱな人になってください、心からみなさんおすこやかな成長をいのってごあいさついたします。

同誌が、役割を終えたことを宣言した文章である。しかしながら『少年クラブ』読者は、廃刊後も『少年マガジン』の読者として愛読することを望んでいる。読者を失いたくない、という編集部の強い思いと見て取れる。時代のニーズに対応してきた同誌であったが、マンガ誌の台頭やテレビの登場により、その役割が時代に対応できなくなった。それに伴い役割を終えることになった。「どうぞ、強く、あかるく、たのしいことを、ゆうかんにできりりっぱな人になってください」という言葉からは、講談社が雑誌発刊時に宣伝してきた「おもしろくてためになる雑誌」を読み、「えらい人」になるという、立身出世のイメージが映し出されるのである。

同誌の終刊号の誌面に、こんな愛読者へのあいさつがのせられた。「『少年クラブ』で思い出されるのは、児童文学史にのこる名作の数々である。吉川英治の「神州天馬侠」、佐藤紅緑の「ああ、玉杯に花うけて」、山中峯太郎の「敵中横断三百里」があった。漫画でも田河水泡の「のらくろ」、や島田啓三の「冒険ダン吉」があり、当時の子どもたちを熱狂させてものだった。49年間の最後部数は、昭和11年新年号で75万2000部に達している」の記載から、同誌は多くの読者に多くの名作を生んだことがはっきりわかる¹⁷⁾。

7. おわりにー “メディア” と “マンガ” に太刀打ちできなかった『少年クラブ』ー

1962年12月を最後に同誌は廃刊となった。以下に掲載したのは、終刊号の目次である¹⁸⁾。

【目次】（ ）内は頁数

- ◆特集①宇宙時代 (61) 特集②スポーツダイヤル (159)
 - ◆感動小説「でっかい希望の雲がわく」(78)
 - ◆冒険小説「太陽のきば」(178)
 - ※がんばれ、ベネディクト (88)
 - ※映画物語 (174)
 - ※ものしりシリーズ (195)
 - ※芸能チャンネル (227)
 - ◆ぼくらのページ (127)
 - ※ふるくのつくり方 (140)
 - ◆見ておもしろくよんでためになる「ゴールデンクラブ」(243)
 - ◆ガロロQ (5)
 - ◆よたろうくん (12)
 - ◆町は青空 (33)
 - ◆かみくずおやこ (93)
 - ◆戦車城攻撃隊 (109)
 - ◆ロボット三等兵 (143)
 - ◆マリンキング (211)
- <大判別冊ふるく>
名戦闘機、ふしぎな少年、ガロロQ、太平洋戦争
名銃プレゼント (188)、ラッキーボーイ (242)、フジペット当選者発表 (242)
- 【編集人】樋口力 【発行人】鈴木松雄 【印刷人】高橋武夫

【印刷所】大日本印刷株式会社（東京都新宿市谷加賀町）

【発行所】株式会社講談社（東京都文京区音羽町三ノ一九）

全 268 頁で定価 160 円で販売された『少年クラブ』誌の終刊号は、すでにテレビの影響を受けたものとなりえていた。また未来を見据えた少年雑誌に変貌していたかのようにある。「ぼくらのページ」は「おたより」欄が設定されていたが、「手塚治虫の大ファン」、「ゴールデンクラブ」は必ず読む、「ふろくが最高」などの投書が多いものとなっていた。すでに仲間意識、連帯感をもとめるものは見られなかった。

また「芸能ちゃんねる」といった新たなコーナーも登場し、誌面のヒーローのみならず、テレビのスターなどにあこがれる読者も増えていたものと思われる。誌面に多く割かれることに。三波春夫、豊和（父子）、飯田久彦、中村勘九郎、淡路恵子などがネタになっていた。第一線で活躍していたスターが誌面に踊った。

また合併されることになる『少年マガジン』の広告の一節である¹⁸⁾。

まんが：野球、プロレス、科学、冒険、探偵まんがなどから、だれでもわかいころげるようなゆかいなまんががたくさんあります。

ニュース：野球、すもうなどから、世界中の科学ニュースまでいろいろあります。これを読むだけでも 40 円の値打ちはあります。

学習ページ：中学へ進学するための勉強法、英語の学習のための新辞典などいろいろあって、勉強に役立つものがいっぱいあります。

写真特集：飛行機・船・科学兵器、そのほか、めずらしい物の美しい特集が毎号あります。これだけ毎週集めてもすばらしいのです。

少年クラブのお友達週刊誌

『少年マガジン』毎週水曜日発売定価 40 円。

みんなで週刊少年マガジンを読もう

まんがもいっぱい、ニュースもいっぱい、そのうえ勉強にも役立つすばらしさ！

◆大人気の野球まんが

ちかいの魔球

◆プロレスまんが

チャンピオン太

◆まちがいさがしクイズ

あなたに五百円あげます

◆きみにもできる催眠術入門

◆マガジン自動車学校

- ◆ぼくとわたしの学習新辞典
- ◆中学受験必勝法
- ◆ぼくらの英語大学
- ◎100万ドルスピードプレゼント
- ◎切手プレゼント
- ◎コインを集めよう
- ◎スポーツニュース
- ◎マガジン=デパート
- ◎おわらい大学
- ◎チャンピオンクイズ

戦後の多くの児童・少年雑誌はたしかに読者らに求められたものであり、夢や勇気を与えるものとはなかった。しかし読者の趣味・関心の多様化には対応できなかった。『少年倶楽部』についても見事には復刊を果たしたものの、すでに読者共同体の形成を求めた雑誌としてはなりえず、読者の関心の多様化にマッチするよう努力を重ねたが、それに対応することができずに廃刊となったのである。

【註】

- 1) 戦後間もない時期に復刊した雑誌は多く、例えば講談社刊行雑誌でいえば『幼年倶楽部』（のちに『幼年クラブ』と表記される）が1945年10月より復刊した。（詳しくは田中卓也「戦後の児童雑誌の光と影—大日本雄弁会講談社刊行雑誌『幼年倶楽部』を中心に—」平成24年度日本児童文学学会中部支部例会秋季例会（於：中京大学名古屋キャンパス0号館6F大会議室）口頭発表、2012年9月29日）。また小学館刊行雑誌『小学一年生』についても1947年より復刊を果たした（以後『小学六年生』まで順次復刊）。『小学館五十年史年表』（小学館五十年史編纂調査会、1975年）によれば、戦後の『小学一年生』の復刊は、1947（昭和22）年4月のことであったとされる。1925（大正14）年には『セウガク一年生』、『セウガク二年生』が相次いで発刊されることとなり、ここで小学校の全学年分の学習雑誌が顔を揃えることとなった。当時は『一年生』として発売された同誌は、A5版の総30頁からなる雑誌であった。また戦後の混乱期に出版されたこともあり紙質も粗悪であった。発行部数は6万9000部ほどであったとされる。（田中卓也「小学館刊行学年別学習雑誌『小学一年生』の普及と読者の様相」日本子ども社会学会第19回〈於：國学院大学たまプラーザキャンパス〉口頭発表、2012年7月1日）、同「小学館刊行学年別学習雑誌『小学六年生』の読者に関する研究」日本乳幼児教育学会第21回大会口頭発表（於：東京成徳大学、東京成徳短期大学、2011年12月3日）。
- 2) このような投書欄の傾向が見られるものには、集英社刊行雑誌『少年ブック』、『少女ブック』、『幼年ブック』などの各誌、先述した小学館の学年別学習雑誌などがこれに該当する。詳細については田中卓也「『少年ブック』における読者意識に関する研究」日本保育学会第64回大会ポスター演題発表（於：玉川大学）、同「児童雑誌『少年ブック』における読者の研究—前身雑誌『おもしろブック』の創刊と同誌愛読者の特徴を中心に—」日本幼児教育学会第19回大会口頭発表（於：敬愛大学）、2012年9月12日、同「集英社刊行児童雑誌『少女ブック』の誌面構成と読者の様相」日本幼

児教育学会第20回大会口頭発表（於：駒沢女子短期大学）、2012年9月30日。

- 3) 黒古はさらに以下のように述べている。「『少年倶楽部』の変遷を足早に見ただけでも明確になるのは、「大衆化」したメディアは多くの国民（児童）に対して知的啓蒙活動を行うと同時に、「体制・権力」の意図を代弁する格好の宣伝媒体の役割を果たす、ということである。このことを別な角度から言えば、メディアの「大衆化」は「体制・権力」に媚びることによって実現し、マスコミ・ジャーナリズムが本来的に内在させているはずの「反権力」とは全く無縁であることによって、その存在意義を見出すということである。そのような考えに立てば、『少年倶楽部』が日中戦争から太平洋戦争にかけて多くの雑誌が休刊や廃刊に追い込まれていくのを尻目に、ページ数こそ六〇ページそこそこから三〇ページ程になったが、戦時下から戦後へ切れ目なく発行することができた意味も、自ずから判明するだろう。戦後に誌名こそ『少年クラブ』となったが、創刊から廃刊になる一九六二（昭和三七）年一二月まで、関東大震災で一度、敗戦後の紙不足時代に一度休刊を余儀なくされた以外、『少年倶楽部』は臨時増刊号を含めて四八年間で全六一一冊、見事に刊行され続けてきた希有な児童文学雑誌だったのである」。
- 4) 『金の船』・『金の星』に関するものとしては、田中卓也「近代児童雑誌における読者の研究—『金の船』を中心に—」中国四国教育学会『教育学研究紀要』第58巻第1部（教育学部門、CD-ROM版、2007年3月）、同「近代児童雑誌『金の船』・『金の星』における作品選者群像—子ども読者とのかかわりを中心に—」中国四国教育学会『教育学研究紀要』第59巻第1号（教育学部門、CD-ROM版、2008年3月）がある。当時の『少年倶楽部』、『少年世界』などの人気雑誌に多くの読者を奪われていたものの、純粋から高貴なイメージをもつ「よい子」を読者の中心にすえていくことになった。
- 5) 『『少年倶楽部』【八・九月合併号】について』（社史編纂委員会編『講談社の歩んだ五十年 昭和編』1959年、560頁）。
- 6) 講談社刊『キング』（1939年4月号）。『キング』についての研究は、佐藤卓郎『“キング”の時代』（岩波書店、2000年）などに詳しい
- 7) 講談社刊『幼年倶楽部』（1939年10月号）。戦前期までの『幼年倶楽部』に集った読者の年齢層、様相については田中卓也「『幼年倶楽部』にみる読者層の形成」中国四国教育学会『教育学研究紀要』第56巻第1部（教育学部門、CD-ROM版、2006年3月）を参照されたい。「通信」といわれる投書欄も設けられていたが、読者共同体の形成については資料からはとくに見ることはできない。
- 8) 『少年倶楽部』大日本雄弁会講談社（第33巻第1号、1946年1月1日）。
- 9) 同誌第33巻第4号（1946年4月20日、定価4円 送料5銭）。
- 10) 同誌第33巻第2号（1946年2月20日）。
- 11) 同誌第33巻第9号（1946年9月20日）。
- 12) 同誌第47巻第1号（1960年1月1日）。
- 13) 「愛読者ルーム」同誌第47巻第1号（1960年1月1日）。
- 14) 昭和戦前期までの『少年倶楽部』の投書欄についての分析は、田中卓也「近代少年雑誌における読者の共同体形成に関する一考察—『少年界』・『少年世界』の子ども読者の比較を通して—」（関西教育学会年報通巻第36巻）のなかで若干ふれている。『少年界』・『少年世界』に劣ることなく、『少年倶楽部』の読者の多くも、中学校、高等学校への進学意識も高い読者も存在し、誌面を通じて交際を求める投書も少なくなかった。
- 15) 同上。
- 16) 前掲、社史編纂委員会編『講談社の歩んだ五十年 昭和編』、302頁。
- 17) 同上。
- 18) 同誌終刊号（1962年12月号）。

※本稿は、日本児童文学学会第51回大会（2012年10月30日、於：千葉大学西千葉キャンパス）の口頭研究発表の内容を加筆、修正したものである。